
不幸の星の下

(黒)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不幸の星の下

【コード】

N5956D

【作者名】

(黒)

【あらすじ】

不幸のどん底の青年が病院で出会った人とは・・・

(前書き)

初心者です。

駄文です。

つまらないです。

それでもいいと言う方は最後まで読んで頂けると嬉しいですよ。

僕の名前は田中一郎。39歳。既婚。子供なし。兄弟無し。小、中、高といたって普通の学校卒業。1年前までは大手の会社に勤めていた。しかし会社でミスをしてしまいクビになり、今は工事現場で働いている。去年、働いていた会社をクビになり、友達に騙されて3000万円の借金はあるは、妻には逃げられるは、家や家財道具は全部差し押さえられるは、住むところがなくて実家に居候してたら親父とお袋は喧嘩して離婚するし、友達の家にいったら友達が死んでて犯人と間違えられるし、食うものがなくて道端に落ちてたのを食べたら腹壊すし、深夜2時ぐらいにまた腹が痛くなってそれで仕方がないから公園のトイレで用を足していたら、お化けと間違えられて水かけられるし、黒猫は横切るし、からすはこつち見て鳴くし。なんていうか、すごい不幸の星に生まれてしまった人間。

そんなこんなで、この工事現場で働いているわけだけど、実際にここを紹介してくれた人はいいい人だ。身分証明書とか履歴書とか身元保証人とか全部要らないから働かないかと言ってきてくれた。多分この人は「仕事がない人に仕事を上げる会」とかの会長をやっている人に違いない。だって、周りの人をよく見ると外人ばつかだもん。今外人の働き口がないっていうし。まあこんな世の中だし、仕事を選んでは食っていけないし。残りの借金あと5000万円がなければって返済しなきゃな。

ん？増えてるって、いや実は親父とお袋が喧嘩していた理由が親父がギャンブルで負けて作った借金で、俺が肩代わりをする羽目にな

ってしまったというわけで、借金が一気に2000万円増えてしまい、初めは自己破産をすればいいと考えていたんだけど、親父がもう一回自己破産したらしく、自己破産できなかつたため、今必死で借金を返しているというわけさ。

まあ、そんなこんなで毎日働いているわけだけど、今日の仕事はいつにも増して大変だなー。なんか知らないけど僕は今上空200メートルの地点で仕事をしている。現場監督が
「キョウハキミニ、ウエノシゴトヲシテモライマシヨウ。ハハハハ。」

とか言つて、強引に僕を上のように連れつてちゃうし、けど逆らつて仕事をくびにされちゃつたらやだし、仕方無いから上のほうで仕事をしている。僕の仕事はひたすら鉄筋をもう一人の人に渡して行くという、ごくごく簡単な作業なわけだが、この鉄筋がなかなか重くて、仕事がかからない。それに上空200メートルということもあつて、風が強く、バランスを崩したら一気に下にまっさかさま、なんてこともありえるから気をつけて仕事をしなくては。

だいぶ上のほうでの仕事も慣れてきて、昼食に時間まで後20分という時間になった。いつもなら汗ダクダクになっているが、きょうは汗を掻いていない。風が強いから、汗を掻くどころか、寒い。けど後20分たてば、昼食で下に降りられる。それまで我慢だ。5分、10分、15分とたち、昼食まで後5分となり、気が緩んでしまったのか、僕はバランスを崩してしまった。

「おっととと。」

危うく落ちそうになる。危ない危ない。

ビューー！

突如強い風が吹く。

「おっととと」

お？あれ？足が宙に浮いている。もしかして、お・ち・た。

「うわー！」

僕は一気に空中200メートルから落下した。

「あれ？ここはどこだ？確か僕は・・・」

現場監督に上の方で仕事をしろって言われて、仕事をして、飯の時間まで後5分ぐらいになって、バランスを崩して、風が吹いて、

「あ！そうだ。確か僕は足場から落ちたんだ！」

その後、どうなったんだ。必死に落ちたときの事を思い出そうとすると、

ズキ！

と痛みがきた。僕はいつたいどれぐらいの怪我なんだろう。少しして、看護師らしき人が来た。

「あの、すみません。」

「はい？」

看護師が答えると、僕は続けて言う。

「えーっと、ここは一体どこでしょうか？僕は一体どうしたんですよ？今日は何日ですか？僕は一体どれぐらい眠っていたのですよ？治療費はいくら位なんですか？僕はお金なんかぜんぜん持っていません。」

僕は看護師にいった。看護師は

「落ち着いてください。大丈夫です。ここは市立病院です。田中さんは落ちたんですよ、工事現場から。でも奇跡的に助かって今入院

しています。だいたい全治二週間といった所でしよう。えーっと、田中さんが入院したのが、26日ですからあなたは丸2日間寝ていましたね。治療費のほうはですね、えー田中さんは医療保険に入っているんじゃないので、えー治療費のほう50万円って所でしようか。」

看護師は言った。

「え？治療費はいくらと聞いてましたか？」

僕は聞き返すと、

「50万円ぐらいですね」

という返事が返ってくる。

「それではまた、後ほど夕食のときに来ます。」

看護師はそう言うつと病室から立ち去っていった。

「50万円か・・・どうしよう?」

僕は困っていた。借金があるから保険に入るわけにはいかなかったし、まさか工事現場から落ちるとは思わなかったし。あれ、そういう仕事の方はどうなったんだろう?ふっと考えがよぎると、テーブルの上に手紙が置いてあるのが見えた。

「ん?何だこの手紙は?」

僕は手紙を見ると、こう書いてあった。

「退院しても仕事に来ないでください。」

と書いてあった。

「うわあ、最悪だよ・・・」

また借金は増えるし、仕事はなくなるし最悪だよ。やっぱり僕は不幸の星の下に生まれたんだなあと改めて実感が出てきた。まいったなあ、これからどうやって借金を返せばいいんだろう?そんなことを考えていると病室のドアが開いた。

「兄さん、やっと見つけたよ。」

ん？どつかで聞いたことのある声だなあ。誰だっけかな？…兄さん？兄さん！もしかして次郎か？

「久しぶりだね、兄さん」

声の主は田中次郎、今は婿養子に行つて鈴木次郎になつたはず。ん？最初に兄弟はいないつて書いてある？それは次郎が高校2年生の時に家出をしてそのまま行方不明になつていたからである。ぼくはたまに一年に一回ぐらいあつていたが次郎の頼みで両親には言っていない。子供が一人いる。

「兄さんの携帯に電話してもでないからなにかあつたと思つていろいろとさがしたんだよ。」

「悪い悪い。携帯ずーと見てなかつた。それにしょうがないだろう。今の今まで意識がなかつたんだから。」

「それにしても大丈夫そうだよかつたよ。」

「大丈夫なわけないだろ？全治二ヶ月だぞ。」

「えーでもメチャクチャ元気じゃん。」

「次郎が来てくれたからだよ。」

「ハハハ」

何気ない会話をしながら時間が過ぎていく。一時間ぐらいたつた時、次郎がこう切り出してきた。

「兄さん、ちよつと。」

次郎が神妙な面持ちで話し掛けてくる。僕は、ん？といった感じの顔をして次郎の話に耳を傾ける。

「治療費どうするの？兄さん借金もあるんでしょ？」

「なんだそんなことか。次郎が妙な顔するから嫁さんとうまくいつてなくて、そのぐちでも聞かされると思つたよ。ハハハ」

「ちよつと笑い事じゃないよ、兄さん！」

次郎がどなつた。僕はキョトンとしてしまった。

「5000万だよ。5000万。どうやって返済する気？仕事もなくなつちやたんでしょ？兄さんは人がいいからすぐ騙されるしさ。

それよりも悪いのは父さんだよ、ギャンブルで負けて借金だなんて、

バカじゃないのまったく！母さんも母さんだ。」

「次郎！他の人たちにも迷惑だろ！」

僕は次郎を怒鳴った。僕の周りには沢山の入院している人がいる。相部屋だからだ。その人たちに迷惑だから、次郎に話すのを止めさせた。

「すみません、皆さん。」

次郎は皆に謝った。

「でも、どうするの、本当？すこしぐらいなら僕も手伝つよ。」

「大丈夫だつて50万円ぐらい僕だつて持つてるし、借金もがんばつて返すから。お前は心配しなくていいから。お前はもう一人じゃないんだろ？嫁さんもいるし子供だつているだろ。」

本当は次郎に手伝つて欲しかった。しかし次郎の生活を考えると僕には手伝つてなんて言えなかった。

「子供は元気か？確か花子だっけか？」

僕は次郎の子供の話に話題を変えた。次郎はいわゆる親ばかりでやつで子供の話しになると止まらなくなる。

「花子か？元気だよ。つていうか可愛いよ、可愛すぎるよ。この前も幼稚園の劇でな花子がお姫様の役をやったんだけどな、もう可愛いのかなのつて他の子があの子の引き立て役みたいな感じさ。木の役とかやつてることもがさ、哀れに思えてしょうがないさ。それよりも昨日さ、」

「ゴホン、ゴホン」

入院患者の人が一人咳払いをする。うるさいのかなと思つて

「すみません。」

といつて、相手の顔を次郎が見ると急に次郎が静かになった。

「兄さん、あの人さつき言った劇の木の役の子のおじいちゃんだよ。悪いこと言つちやつたな。まあいいや。」

いいのかよと僕は心の中で思ったが言わないことにする。

「じゃ、僕帰るけど、ちゃんとお金のこと真剣に考えてよ。じゃあ、またいつか来るから」

。じゃあね。安静にしててね。」
次郎はそういつて病室から出て行った。

次郎が来てから10日がたった。相部屋の人たちとはちょっとは親しくなれた。まず最初に仲良く慣れたのは僕のベッドの真向かいの平井さんだ。平井さんは会社で係長をやっているらしい。いろいろと気苦労が多く、胃潰瘍になって入院したらしい。奥さんが毎日のようにお見舞いに来てくれていて、とても夫婦円満な家庭みたいだ。

次は僕のベッドと斜め向かいの子、隆君だ。隆君は中学三年生で今年受験らしい。部活でサッカーをやっていてそれで練習中に骨折してしまったとか。入院してからも毎日のように勉強をしていて、学校で取り残されないように必死だ。

最後の人は中山さん。常に包帯で全身をグルグル巻かれている。火事かなんかで火傷をしたらしい。とても無口でこちらから話しかけないと話してくれないし、話しかけても

「ウン」

とか

「ハア」

とかしか喋らない。まあでも多少は意思の疎通ができるからよしとしよう。

10日で大分身体も良くなってきた。このぶんなら結構早く退院で

きそつだ。それよりも、僕は中山さんのほうが気になる。

正確に言つと、中山さんをお見舞いに来ている人の一人が気にかか
る。中山さんをお見舞いに来る人はネクタイやらスーツやらを着て
なんていうか、エリート社員つぽい感じがする人たちである。

ある日そのエリート社員つぽい人に

「今度ちよつと話がしたいんですけど。」

といわれた。僕はこんなエリート社員つぽい人に話をされる覚えは
ないが、とりあえず

「ハア、いいですよ。」

と了承して明日の午後1時ぐらいにロビーで待ち合わせをした。

一日たった。時計がもうすぐ一時を回りそうなので僕は待ち合わせ
をしているロビーに行った。そこにはエリート社員つぽい人が待っ
ていた。

「すみません。待ちましたか？」

ぼくはエリート社員つぽい人に聞くと

「いいえ、いま来たところです。」

と言った。エリート社員つぽい人は

「どうぞ」

といつて缶をコーヒーをくれた。

僕は

「すみません。ありがとうございます。」

と言つて缶コーヒーをもらった。

「ところで、話つて何ですか？えーと？」

僕は相手の名前を言おうと思つたが、まだ自己紹介をしてなかつた
ことに気づいた。

「すみません、僕の名前は、」

「田中一郎。39歳。既婚。子供なし。小、中、高といたつて普通
の学校卒業、ですよね？」

僕は何でといった感じでエリート社員つぽい人を見る。エリート社

貰っぱい人は名刺を渡してくる。僕はそれを貰って

「えーっと、中山コンツェルン製薬部部长、木村太郎。ん？中山コンツェルン？中山コンツェルンってもしかしてあの有名な？」

木村さんは中山コンツェルンの部長さんらしい。ちなみに中山コンツェルンは日本で五本の指に入る大企業である。

「で…中山コンツェルンの部長さんが僕に何のご用ですか？」

僕は聞いた。すると木村さんは

「まず最初にあなたと一緒に病室にいる包帯でグルグル巻きの人、その人こそ中山コンツェルンの社長、中山四郎です。」

僕はびつくりして声がでなかった。木村さんは続けざまにしゃべってくる。

「社長がなぜこんなところにいるかというところ…都内の病院とかに行ってもし記者などにばれたりすると、株価などに影響するから駄目なんです。だから地方の病院の相部屋みたいのがばれにくいんです。それに都内でも地方でも社長の病気は治せないんです。」

木村さんは言った。

「中山さんいったいどんな病気なんですか？」

僕は気になったので木村さんに聞いた。

「私が今日お話ししたかったのはそこなんです。」

「え？」

僕は言っている意味がよくわからなかった。なぜ僕にそんな話をするのだろうか。

「社長の病気はまだ名前もありませんし、原因もわかってません。

何故か体中がどんどん真っ黒になっていき2週間たったら死ぬという病気です。」

僕は更に言っている意味がわからなかった。

「この病気は古代ローマで一時期猛威を振るった病気です。治す方法は…というより他の人に移す方法ですけど、病気の人の体に触ると病気が移ります。」

「はあ。」

僕はどう返事をして言いかわからなかった。

「移っても病気のカウントはリセットされないの、今仮に他の人に移ったとしても、後4日で死にます。」

「はあ。」

驚いたというよりもこの人の作り話に聞こえてきた。

「お話と言つのはここからです。実はあなたに死んでもらいたいのです。」

ふーん。僕に死んでもらいたいのか。ん？僕が死ぬ。

「ちよつと待つてください。僕に死んでくださいってどういふ事ですか？」

「ですから、あなたに社長の病気を変わってもらいたいんですよ。」

「でも、なんで僕なんですか!？」

「一億。」

「ハイ？」

「一億円です。一億円ならあなたの借金も治療費も払ってもまだ四千万円以上あります。私たちの力で病気にさえなってくれればすぐに退院させてあげます。残りの余命を楽しく過ごすには十分ですよ。」

「……」

僕はどうしようかと考えていた。いやもう答えは決まっていた。僕が生涯働いても絶対に返せないような借金を返せる上に四日で四千万も使える。それにここで借金を返せなかったら…次郎にも迷惑がかかる。僕はこの話を受けることにした。それに僕はなんだかこの話しが作り話だと思っている。いかにもうそくさい。

「やります。僕が病気をもらえばいいんですよ？それで一億円入るんですよ？」

「はい。必ず。しかしひとつ問題が。」

問題？なんだろう？

「この病気で死ぬ人はとてもすごい激痛で死にます。この世の全ての痛みを受けるぐらいの痛さです。それでもいいですか？」

「…はい、全然大丈夫です。」
僕は一億円という大金のことしか考えてなく、その後のことは考えていなかった。木村さんの顔が妙に笑っていたのに気がつかなかった。

ロビーの会話から二時間たった。僕は病室に戻ってベッドで横になっていた。いつ中山さんの身体に触って病気を自分に移そうかとタイミングを計っていた。しかし僕には秘策があった。中山さんは3時半になると必ず昼寝をする。その時に中山さんの身体触ればいい。時間は3時25分。もう少しで中山さんは寝る。寝たらすぐ触ればいい。

「グゴ、…グゴ。」

もういびきが聞こえる。すぐ寝れる人だなあと思いながら、僕は中山さんの身体に触った。

「よし。」

僕はつい声をだしてしまった。

「うん？なんだ？」

やばい、中山さんが起きる。しかし、もう触ったので大丈夫だ。僕は急いで病室から出た。

僕は病室から出て名刺に書いてあった木村さんの電話番号に電話した。

トウルウウウウルン、トウルウウウウルン、トウルウウウウルン

「はい、木村です。」

「僕です、田中です。」

「あー田中さん。もしかしてもう終わりましたか。」

「ハイ。大丈夫です。中山さんに触りました。」

「ありがとうございます。では後はこちらで手を回しておきますので明日の1時には退院できますよ。」

「ぼくはうれしくてつい、やったー！と言いそうになったが、なんとかこらえた。」

「明日退院したらまたこの番号に電話してください。迎えのものが行きますから。」

なんと迎えの人まで来るのか。やっぱり日本で五本の指に入るような会社の人はちがうなと思った。とにかく明日が楽しみだ。

ついに朝が来た。僕は楽しみで仕方なかった。ついに今日は一億円といった大金が手に入るのだ。昨日の夜は全然眠れなかった。早く午後になって欲しい。心からそう思った。

朝食、昼食とご飯を食べ、後1時間で退院できる。とても楽しみだ。時間の流れがこんなにも遅く感じるのは生まれて始めてかも知れない。………やったー、1時になった。僕は病室の皆さんに別れをいった。

「いままでありがとうございます。今日で退院することになりました。」
皆はおめでとうとってくれた。僕は早く一億円が欲しくて別れを惜しみながら病室を出た。

ロビーに出てまず最初に木村さんに電話した。

トウルウウウウルン、トウルウウウウウルン、トウルウウウウウルン

「はい、木村です。」

「僕です、田中です。今から退院するところです。あの、でも問題が一つがあります。」

「なんですか？」

「治療費がありません。」

「大丈夫です。払ってありますから心配しないで下さい。」

「あ、そうですか、えーと迎いの車が来るんですよね？」

「ハイ、では後5分くらい待ってください。」

そういつて電話が切れた。僕は5分くらい待った。

僕は今車の中にいる。リムジンだ。あの後すぐ車が来て、木村さん
のいる中山コンツェルン本社に向かっている。そこでお金がもらえ
るらしい。

「後どれぐらいでつきますか？」

僕は運転手に聞いた。

「後2時間ほどです。」

という返事が返ってきた。……急に眠くなってきた。そういえば
興奮して一睡もしてなかったっけ。

「すみません。ついなら起してもらえますか？」

「わかりました」

僕は眠りに着いた。

恐らく2時間たったんだろう。僕は運転手に起された。車から降り

るところにはいかにも日本で五本の指に入るような会社つてかんじのビルが建つていた。とても高い。地上100階くらいあるんじゃないだろうか。僕も工事現場の上のほうで作業をしていたが、そことは比べものにならないほど高かった。

「うあー。すげー」

とつい声に出していつてしまった。

「お待ちしておりました。」

声が出た。木村さんだ。

「そんなにすごいビルですか？」

「ええ。すごいなんてもんじゃないですね。」

「お金の方は応接室の方に用意してありますのでまずは応接室のほうへ。」

僕は応接室まで案内された。

「ではこれが約束のお金です。」

目の前にトランクが出され中には大量の札束が入っていた。

……言葉が出なかった。実際にお金を出されるととてもすごい威圧感みたいなものがでててなんていうか、これは夢かなみたいなことを思ってしまう。

「はあ、すごいっすね。実際に見ないと安心できませんでしたが、実際に見るとなんか夢みたいですね。」

「……まあ長い間車に乗っていて疲れたでしょう？コーヒーでも飲んでください。」

テーブルの上にはコーヒーが乗っていた。僕は

「あ、じゃあ頂きます。」

僕はコーヒーを飲んだ。今僕の頭の中ではこのお金で何をするかで頭の中がいつぱいだった。借金を返して、美味しいものでも食べて、そっちな、なにをしようかなあ？……あれ何だか急に眠くなって

きた。だめだ意識が。僕はコーヒーカップを落としてそのまま眠ってしまった。

「ん？あれ？ここはどこだ？」

僕は見知らぬ場所で横たわっていた。なんだかどこかの倉庫みたいだ。

「お、目覚めたか、計算どおりだ。」

「あなたは。」

そこに居たのは僕に工事現場の仕事を紹介してくれた人だった。

「なんであなたがここに。」

ぼくがそういうと奥のほうから人が一人出てきた。

「木村さん!？」

奥のほうから出てきたのは、木村さんだった。

「すみませんね、田中さん。」

「なんで木村さんまで…は！もしかして！」

「そうですねよ田中さん。あなたが応接室で飲んだコーヒーには睡眠薬が入ってましてね。」

そういえば僕はあのコーヒーを飲んだときから眠くなって…

「それよりもなんで木村さんと…」

「私の名前は斉藤ですよ。田中君。」

僕に仕事を紹介してくれた人は斉藤さんというらしい。…そんなこととはおいといて

「何で僕はこんなところにいるんですか？」

「本当は後30分でお別れだからあなたに話しても仕方ないんですけどね。せつかくだから教えてあげましょう。私がどこの部署に勤めているかは名刺をみて分かってますよね。」

僕は木村さんから貰った名刺を見る。

「製薬部。」

「そうですね。製薬部です。製薬部というのは薬を作っている所です

が、必ずしもワクチンだけを作っているわけではありません。ウイルスも作るんですよ。」

ぼくは木村さんの言っている意味が分からなかった。

「あの病室にいた中村さんはわが社の社長ではありません。うちの会社の社員です。」

僕はそれを聞いてはっとなった。

「じゃあ、体がどんどん黒くなっていくという病気は……!!」

「あれはうそです。正確に言うと半分嘘です。」

「半分? いったいどういうことですか!」

「古代ローまで一時期はやっていたと言うこと、触ったら移ると言うところですね。」

「あの病気の話は私たちの部署で作った新作のウイルスのマウスでの実験の結果のことです。」

「あなたに最初に会ったときに渡した缶コーヒーの中にウイルスをいれておいたんですよ。」

「簡単に言えばあなたはわが社の人間のモルモットに選ばれたんですよ。」

木村さんの話を聞いているうちにどんどん僕の顔が青ざめた。

「おっとそろそろ時間ですよ、木村さん。」

斉藤さんが言った。時間とはなんのことだ?

「もう少しでタイムリミットが来るんですよ、ウイルスの潜伏期間がたつてね。」

「後5分です。最後の時間を楽しんでください。」

僕は死にたくない、神様がいるなら助けてくれ。お願いだ。まだ死にたくないよ。斉藤さんと木村さんの声を聞きたびに、寿命が削られてくみたいだ。……何だか心臓が痛い。やっぱり死ぬのか。助けてくれ。

「最後にひとつだけ聞かせてくれ、何で僕なんだ?」

木村さんは僕の話の話を聞くと笑った。

「あなたのお母さんとお父さんがあなたを売ったんですよ、借金手ヤラのかわりに。」

「え？」

僕は一瞬木村さんがなにを言ったか分からなかった。・・・分らなかったたんじゃなくて、分かりたくなかったただだった。しかし認めなければならぬ。僕の母さんも父さんもやらないと、僕を売ったりしないと願いたい。しかし母さんと父さんが借金を残して離婚して僕の前からいなくなった時点でもう・・・信じられなくなっていた。木村さんの作り話としんじたい。でも・・・だめだ。僕は木村も母さんも父さんも信じられない。・・・涙が出てきた。この涙が今から死ぬと言う恐怖から来た涙なのか、親に売られたという悲しみから来た涙なのか、僕にも分からない。

「後10秒、9、8、7、6、5、4、」

このカウントダウンが終わったら死ぬのか。死にたくない。母さんと父さんに会って話しがしたい。さっきの木村さんの話が本当かうそかどうか聞きたい。

「3」

過去に戻りたい。病院にいたとき？工事現場で働いていたとき？・・・ちがう家族4人で楽しく暮らしていたときだ。

「2」

頼む、だれか助けてくれ。死にたくないよ。お願いだ。僕にはまだやりたいコトがたくさん残ってるんだ。

「1」

あー死にたくないよ。誰か助けてくれ、お願いだ誰か助けてくれ。・・・人間死ぬ前になるといろいろなことが頭をよぎるな。小学生のとき、中学生のとき、高校生のとき、会社に入社したとき、香と結婚したとき、友達にだまされて借金したとき、母さんと父さんが離婚したとき。色々な出来事があったんだなあ。・・・死にたくないよ。

「兄さん、目が覚めたのかい。父さん、母さん、兄さんが目を開けたよ。」

「なんだここは、天国か？地獄か？」

「何言ってるんだよ兄さん。ここは病院だよ。」

「え？」

「心配したんだよ、兄さんが病院から勝手に抜け出して行方不明になつて。」

「え？」

「え？じゃないよ兄さん。それよりも父さんと母さんが仲直りしてくれたんだよ。それに借金も全額返してくれたんだって。」

「え？」

「なんだって？」

「それに兄さんの友達が事業に成功して借りたお金の倍額返してくれたよ。よかつたね。しかも兄さんのお嫁さんが帰ってきてくれたんだよ。」

「あなた!!！」

「香！帰ってきてくれたのか！」

「ごめんね、もうどこにも行かないわ。」

「あ、兄さんあとね昔兄さんが働いていた会社から電話があつて、もう一回会社で働いてくれないかだつてさ。」

「夢でも見ているのかと思つてほつぺたをつねった。痛い。現実だ。」

「うわーい!!やったー!!！」

「兄さんったら子供みたいに喜んじゃつて。」

僕は会社に復帰し子供もでき、幸せにくらしている。しかし木村さんと斉藤さんたちのことはいったい何だったんだらう？けっきよくそれだけが謎だ。でもいいや、今が幸せだし。

「木村さん、結局今回の薬は一体どんな効果があったんだい」
「人を幸せにする薬。」

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5956d/>

不幸の星の下

2010年10月27日18時31分発行